

日本におけるドナルド・キーン略年譜 〈3〉 2015 - 2016

北 嶋 藤 郷

はじめに

ドナルド・キーンの学友であり、戦友であり、生涯の友であったオーテス・ケーリ（1921-2006）は、宣教師の子として小樽で生まれた。日本語を流暢に話し、べらんめえ調で日本人捕虜に話しかけたり、興に乗ればずーずー弁で「湖畔の宿」を歌ったりする独特なユーモアを持った陽気な男であった。

2018年7月21日、敬和学園大学初代学長の北垣宗治著『オーテス・ケーリの生涯』の出版記念会が京都で盛大に開催された。敬和学園大学にCary-Newell 奨学金が設置されているが、北垣先生が学長になったことを記念して、ケーリが設置したものである。北垣先生は、同年4月に上梓された『複眼の思想』の帯封に、「わたしは雑学を恥としない。リベラル・アーツの信奉者だからである。」と書き込まれた。これは先生の学問観を端的に表現されたものである。

ある時、ケーリは「ジョンソンにボズエルがあり、ほくには実存がある」と言ったことがある。実存とは、学生時代の北垣先生のニックネームだ。ケーリには、いつか北垣先生が自分の伝記を完成してくれるであろう、という予感があった。ケーリの波乱の生涯を辿ったこの精緻な伝記は、江湖の喝采を博す書物として長く記憶されるであろう。

記念出版会の出席者には、アメリカからアリス（ケーリ夫人）、彼女の長男、長女、二女が参加された。また、八田英二同志社総長・理事長をはじめとする、多士済々の諸氏の祝辞はユーモアに富み、夏の一服の清涼剤のようであった。ケーリの戦友であり、親友であったドナルド・キーンの姿は、残念ながら無かった。

西暦（和暦）年齢・事跡

2015年（平成27年）

93歳

1月1日、The Japan Times new year Special: RINGING IN THE YEAR OF SHEEP

Donald Keene reflects on 70-year Japan Experience. PAGE 17.

「鬼怒鳴門亭日乗 第1回 日記が物語る、日本文化」(雑誌『和楽』2015年1-2月合併号、第15巻第1号 通巻No. 155 2014年12月1日発行) 1月3日、金子兜太との対談「この年になって時代を脱却したね」『朝日新聞』(朝刊)

文中に、兜太の代表句、「^み水脈の^お果て炎天の墓碑を置きて去る」も引用されている。

1月6日、「Donald・キーン氏講演 in 金沢工大「金沢 鏡花 日本文学魅力を語る」『朝日新聞』(朝刊)。

1月7日、「石川啄木 第8章 詩人啄木、ふたたび」角地幸男訳 雑誌『新潮』2月号、pp. 264-79.

1月10日、「源氏物語」フォルカー・シュタンツェル『ドイツ大使も納得した、日本が世界で愛される理由』幻冬舎、pp.184-85. (シュタンツェル氏は前駐日ドイツ大使)

1月11日、「他国学び 自国を知る」『東京新聞』記事。(「Donald・キーンの東京下町日記」は、¹⁾ 一覧表 (P.145) として掲載。今回は第28回に当たる。)

1月14日、『時代を刻んだ貌 田沼武能写真集』(KKクレブス)に狂言「千鳥」を演じる写真が掲載されている。p.60.

1月20日、クラシック音楽を極めるための月刊情報誌、“MOSTLY CLASSIC” 3月号(通巻 vol. 214)に「ロシア音楽、ロシアの声の魅力」が掲載されている。pp. 12-13.

1月20日、「国際的な目で見直して 日本の悲観論」『新潟日報』(文化欄記事)。

1月24日、「日本人は何をめざしてきたのか～知の巨人たち 第7回 昭和の虚無を駆けぬける～三島由紀夫～」<Eテレ・チャンネル 午後11:00-0:30>

『婦人画報』1月号に、「年賀状」が掲載されている。

2月1日、「鬼怒鳴門亭日乗 第2回 音楽は生きている証」(雑誌『和楽』2015年3月号 第15巻第2号 通巻No. 156)

2月5日、文部科学省検定済教科書『国語六 創造』「かなえられた願いー日本人になること」(小学校国語教科書) 光村図書 pp.230-36.

2月6日、「石川啄木 第9章 啄木、朝日新聞に入る」雑誌『新潮』3月号、pp. 200-13.

2月19日、「俳句の題材選びに新風 子規と野球」『新潟日報』(キーンの自作句「白たまの消ゆる方に芳夢蘭 (ホームラン)」が添えられている)

2月20日、戦後70年「昭和からの遺言」第3部『週刊朝日』pp.48-51.

2月25日、『日本を信じる』瀬戸内寂聴との対談 中央公論新社より文庫版。

2月25日、「俳句の味わい（「おくのほそ道」より）」～ドナルド・キーン
の視点を踏まえて～（講師：西澤翔 新潟市立亀田図書館講演会記録集）

2月25日、“Why Study Foreign Languages?” by Donald Keene（文部科学省検定済教科書 UNICORN *English Communication* 3 pp.52-59.）

2月28日、『記録された記録 東洋文庫の書物からひもとく世界の歴史』東洋文庫、山川出版に〈帯文〉を寄稿。

雑誌『サライ』2月号に、「忘れられないこの一枚 オペラの潮流を変えたマリア・カラスの圧巻の舞台」が掲載されている。

3月1日、「鬼怒鳴門亭日乗 第3回 私の日本文学の師、角田柳作先生」、また【特集】世界が注目する「京都」最強案内の中で、「キーン先生、世界が熱狂する京都の魅力ってなんですか？ - 若き日に京都で暮らし、今、京都名誉観光大使を務める -」（pp.44-49）が掲載されている。（雑誌『和楽』2015年4月号 第15巻第3号 通巻No. 157）

3月6日、「戦後70年：今も続いている国民への忍耐押しつけ」ドナルド・キーンさんインタビュー『毎日新聞』（聞き手：高橋昌紀）。

3月6日、河鍋暁斎記念美術館長・河鍋 楠美氏と対談。埼玉県蕨市河鍋暁斎記念美術館。

3月7日、「石川啄木 第10章 ローマ字日記」雑誌『新潮』4月号、pp. 235-54.

3月9日、記念対談「日本文学者としての原点、それは、日本兵の日記」森太氏は読売新聞東京本社国際部次長 柏崎市産業文化会館（15：30～16：30）。

柏崎市などが主催した、この講演会には、約400名が参加した。太平洋戦争に米海軍語学将校として従軍、戦死した日本兵の日記を翻訳した際のエピソードなどを語った。同市の戦後70年記念事業の一環として開催されたため、市内4校の中学生200名も招かれ、生徒たちには、「若い人たちも戦争がどんなに恐ろしいことか、もっと知るべきです。高見順の『敗戦日記』、井伏鱒二の『黒い雨』、大岡昇平の『レイテ戦記』などを読んでほしい」と檀上から呼び掛けた。対談後、キーン氏は4校の生徒たちにサイン入りの色紙をプレゼントした。

3月10日、「若者よ戦争の恐さ知って」（柏崎でドナルド・キーンさん対談）『新潟日報』記事。

3月10日、「戦争もっと知って キーンさん中学生に語る」『讀賣新聞』記事。

3月10日～9月27日、2015年度特別企画展「太平洋戦争とドナルド・キーン」ドナルド・キーン・センター柏崎。

3月11日、『遷宮』第62回神宮式年遷宮 全記録 写真・宮澤正明（樫出版社）に、随筆「伊勢神宮と私」が掲載されている。pp. 262-66.（キーン氏の初めての遷宮奉拝は、1953年の31歳の時、それから20年ごとの遷宮の全てを奉拝して、60年の月日が流れた）

3月20日、「キーン先生のメッセージ」柏崎『柏新時報』（第3485号）

3月24日、「耐える姿 日本の心今も 大震災と空襲」『新潟日報』記事。

3月31日、「ノーベル文学賞秘話 幻の日本人受賞者・・・選考過程で何が」NHK 総合TV ニュースウォッチ9に出演。

4月1日、「私が日本人になった理由」（中学3年生の「道徳」の教科書副読本『明るい人生』）愛知県教育振興会発行。

4月1日、鬼怒鳴門亭日乗「第4回 映画と演劇の遊び」（和楽2015年5月号 第15巻第4号 通巻No. 158）

4月2日、「事業検討委員会」（於）「ドナルド・キーン・センター柏崎」（後期企画展、また2周年記念事業等々を検討する）

4月5日、「戦後70年 ドナルド・キーン氏ロングインタビュー」BS-TBS「週刊報道 LIFE」21:00~21:54 p.m. キャスター：松原耕二、アナウンサー：出水麻衣。

4月7日、「石川啄木 第11章 二つの『詩論』」雑誌『新潮』5月号、pp.193-204.

4月8日、「死を予感して心情吐露 日本兵の日記」『新潟日報』記事。

4月12日、啄木没後百年記念追悼講演会 ドナルド・キーン氏啄木を語る「日記にあらわれる啄木」講演録（ゲスト講師 啄木研究者・山本玲子氏）会場：函館市芸術ホール 講演録発行：函館啄木会。

4月14日～5月19日、アメリカ、スイス、イタリア、ドイツ方面へ外遊。今度の洋行では、コロンビア大学で講演、ブロードウェイで渡辺謙主演の『王様と私』（“The King and I”）を観劇、ローマ、フィレンツェ、ベネチアでキーン先生を囲む会などが企画されている。

4月24日、市田隆「『欲望のまま』生身の歌人の姿」。『朝日新聞』朝日新聞編集委員。

5月1日、鬼怒鳴門亭日乗「第5回 生涯の家」（和楽2015年6月号 第15巻 第5号 通巻No. 159）『和楽』の「鬼怒鳴門亭日乗」の連載は第5回

で完結。

5月7日、「石川啄木 第12章 啄木と節子、それぞれの悲哀」雑誌『新潮』6月号、pp. 228-35.

5月9日、『新潟日報』の「日報抄」に正岡子規とドナルド・キーンの句が紹介されている。

- ・春風やまりを投げたき草の原（子規）
- ・白たまの消ゆる方に芳夢蘭^{ホームラン}（キーン）

（『東京新聞』（2015.2.8）の「ドナルド・キーンの東京下町日記『野球を詠んだ子規』」のエッセイを踏まえた記事といえよう。）『新潟日報』（H30.8.30）にキーンの英訳も掲載。

5月11日、「米国上演ならず虚無感 天才『三島』」『新潟日報』文化欄記事。

5月18日、「ドナルド・キーン・センター柏崎」入館者累計が8000人を達成。

5月20日、「啄木 うそと矛盾に現代性」ドナルド・キーンさんに聞く『朝日新聞』文化・文芸欄。

5月27日、竹石松次著『～大倉喜八郎からドナルド・キーン～誇りたかき新潟の52人』「ドナルド・キーン」pp.182-86.

6月2日、「METで輝く日本美術」メトロポリタン美術館学芸員ジョン・カーペンター氏は、コロンビア大学でドナルド・キーン氏に師事した。『朝日新聞』文化・文芸欄記事。

6月5日、「石川啄木 第13章 悲嘆、そして成功」雑誌『新潮』7月号、pp. 238-50.

6月7日、キーン氏の最も優秀な弟子のひとりのロイヤル・タイラー氏がキーン氏を訪問。「キーン先生は愛弟子に会えて、そしてお話が出来て非常にうれしそうでした」とある。

6月15日、「今も高い日本語学習熱 米国・イタリア滞在記」寄稿『毎日新聞』夕刊。（コロンビア大学での講演のタイトルは、「日本における古典文学と哲学の教え方」）

6月19日、米欧訪問 素顔の父ドナルド・キーン：「謙さんの舞台を堪能」キーン誠己『新潟日報』記事①。（ブロードウェイミュージカル「王様と私」(The King and I)で、渡辺謙は、トニー賞主演男優賞を逃すも「王様と私」は、4部門で受賞）

6月20日、上原近代美術館 開館15周年記念講演「下田と私、そして美術」講演後、下田市在住の陶芸家・土屋典康と対談「私の美術の楽しみ方」（下田市民文化会館ホール）

6月22日、高峰秀子著『高峰秀子かく語りき』斎藤明美編・解説（文藝

春秋社版)に、対談「“青い目”の見た日本さまざま」が掲載されている。pp. 281-91.

6月25日、「魅力的な2人の親友」キーン誠己『新潟日報』記事②。

6月28日、「戦後70年県民キャンペーン ホワイト ピース プロジェクト」にコメントを寄せる。文中に、「憲法第九条は、最も美しい世界の宝です。」がある。『新潟日報』p.32.

6月発行、『画鬼・暁斎 KYOSAI—幕末明治の絵師と弟子コンドル』に、河鍋楠美との対談「双方向の東西交流」が掲載されている。pp. 8-13.

7月3日、「名所旧跡 美食を堪能」キーン誠己『新潟日報』記事③。

7月4日、「平和の俳句に『みなづき賞』贈呈。ドナルド・キーン「平和の大切さ問い続けて」全文が掲載されている。『東京新聞』

7月7日、「石川啄木 第14章 大逆事件」雑誌『新潮』8月号、pp. 214-25.

7月9日、「美味しくて食べ過ぎ」キーン誠己『新潟日報』記事④。

7月12日、「偉大なる『大谷崎』」『東京新聞』（ドナルド・キーン「東京下町日記」）

7月14日、「第12回みなづき賞」に祝辞を寄せ、「憲法9条は世界の一番の宝であるはずなのに、平和の意味を理解しない、否、理解できない人たちがいることを、日本人として私は理解できません」などとコメントした。『新潟日報』記事。

7月17日、「巨匠の魂に心震わす」キーン誠己『新潟日報』記事⑤。

7月22日、「折々のことば」(110) 鷺田清一 ドナルド・キーン『古典を楽しむ』引用。

7月25日、「ドナルド・キーン：日本と共にある、人とのつながり」『大人の休日倶楽部』2015年8月号、pp. 4-7、pp.54-55.

7月25日から9月10日まで、軽井沢の山荘で、執筆、読書、散策などして過ごす。

7月31日、日本サラマンカ大学友の会会報誌『サルマンティーノ』(No. 44)に、「対談ドナルド・キーン vs 林家栄吉」が掲載されている。pp. 3-7.

8月6日、『すばる』9月号 第37巻 第9号 【特集】戦争を読む 掲載記事「25人に聞く…戦争を知るための一冊」の中に、キーン氏の「『高見順日記』²⁾ 今こそ読まれるべき本」が掲載されている。p. 248.

8月7日、「石川啄木 第15章 最期の日々」雑誌『新潮』9月号、pp. 244-53.

8月9日、「暴走黙殺の果て」『東京新聞』（ドナルド・キーンの東京下町日記）同日、TV番組「週刊報道 Life」（BS-TBS 9:00p.m. -）の「わたしの70年談話」で、日本を外側と内側から見てきたキーン氏は、「戦後、人々の不屈の意思と勤勉さで、日本は復興してきた」としながらも、古い言葉で「大和」は、“大いなる平和”を意味するもので、今の幸福を基準にして、戦争の悲劇を追認しなければならない、と語った。

8月10日、「ドナルド・キーン・センター柏崎」入館者累計が9000人を達成。

8月12日、「谷崎の恐れ映した『細雪』戦争で消えるかもしれない文化、作品に」『朝日新聞』（文化・文芸欄）

8月13日、「戦後70年に寄せて」時事通信社「教育・文化ニュース」

8月15日、ハワイ真珠湾で、長岡の慰霊の花火・白菊が3発打ち上げられた。（6月28日付『新潟日報』紙（p.32）には、「戦後70年県民キャンペーン ホワイトピース プロジェクト」として紹介された。キーン氏のコメントも寄せられている。

8月18日、「軍部暴走 国民にも問題」『新潟日報』連載記事。

8月24日、山ろく清談「日本 一番進んだ平和主義」『信濃毎日新聞』（日刊）

8月24日、「日本語で捕虜和ます」オーテス・ケーリ：小樽出身米元将校の生涯『北海道新聞』（戦争の悪い事—①、②は8月25日、③は8月26日、④は8月28日、⑤は8月29日と5回連載した。担当は報道センターの井上雄一。）

8月27日、「戦争と軽井沢 節目の年、取材が殺到 愛着ある『家』で過ごす夏」（素顔の父ドナルド・キーン）キーン誠己『新潟日報』（文化欄）記事。

9月1日、「ドナルド・キーン先生のニューヨーク & ヨーロッパ旅行記 - 93歳、なお新しい世界と自分を求めて-」『和楽』2015年10月号（第15巻第8号 通巻No. 162）pp.156-61。イタリアの世界一美しい町ヴェネツィアにあるヴェネツィア大学では、2000人の学生が日本語を勉強している。学生たちと話をし、たくさんの質疑応答があった。

9月1日、小澤征爾の傘寿を祝う、バースデー・コンサート「セイジ・オザワ松本フェスティバル」に出演して、小澤は、ベートーベン「合唱幻想曲」を指揮した。会場のキッセイ文化ホールには、キャロライン・ケネディ駐日米大使らが訪れ、お祝いの言葉を述べた。キーン氏もこのバースデー・コンサートに参加した。

9月7日、「最終章 啄木、その生と死」雑誌『新潮』10月号、pp. 246-52.

9月13日、「『世界のオザワ』に学ぶ」『東京新聞』（ドナルド・キーンの

東京下町日記)

9月20日、「小澤征爾×ドナルド・キーン 音楽、オペラそして人生」キャスト：小澤征爾、ドナルド・キーン 司会：壇ふみ（BS/TBS 開局 15周年特別企画 7：00～8：54p.m.）

9月21日、特別記念講演「思い出の作家たち—今なお、心の中に生きている五人の巨星」特別対談「戦後70年 ドナルド・キーン」～キーン将校が見た日本～（聞き手：堤伸輔）（於）柏崎市文化会館アルフォーレ。

9月22日、「キーンさん柏崎で講演 日米一緒に戦争 恐ろしいこと 安保法に懸念示す」『新潟日報』記事、第一面。

9月22日、「古典にも教育の工夫を『「世界のオザワ」に学べ』『新潟日報』（「ドナルド・キーンの東京下町日記」）

9月26日、「好奇心持ち常に挑戦 美食家、散歩やゴミ捨ても」キーン誠己『新潟日報』。

9月30日、『二つの母国に生きて』朝日文庫。「解説」松浦寿輝。（本書は1987年1月、朝日新聞社より刊行されたものの文庫版。）

9月、『高見順日記』今こそ読まれるべき本』『すばる』9月号。

10月1日、「鬼怒鳴門亭日乗」第6回「軽井沢の庵」『和楽』11月号、小学館、pp. 128-30.（第15巻第9号 通巻 No. 163）

10月1日～12月25日、「ドナルド・キーン・センター柏崎」開館2周年記念展では、10月1日から、三島由紀夫生誕90年没後45年の「三島由紀夫展」を開催。この企画展では、「ドナルド・キーンを選ぶ三島由紀夫お気に入り作品3」を展示。「私は無二の親友を失い、世界は偉大な作家を失った」キーン氏談。（キーン氏が「ニューヨーク タイムズ」紙（1959年5月31日）に寄せた、『金閣寺』の書評³⁾なども翻訳・展示されている）

10月3日、『新潮』連載の評伝「石川啄木」完結「『日記が持つ肉声の力』著者ドナルド・キーン氏に聞く」中澤雄大『毎日新聞』朝刊20面。

10月4日、「超一流の二流芸術国」『東京新聞』（ドナルド・キーンの東京下町日記）写真は、9月22日、キーン・センター柏崎で開かれたサイン会で、ファンと握手するキーン氏。

10月9日、渡辺謙 文学者ドナルド・キーン氏と語った「日本とは」（東京五輪で文化をアピールって）ちょっと肩肘張りすぎじゃ『日刊スポーツ』記事。（p. 21）

10月9日、「三島生誕90年 書簡など展示」『読賣新聞』イベントガイド記事（企画展「ドナルド・キーンを選ぶ三島由紀夫お気に入り作品3」（p. 27）。

10月10日、NHKスペシャル「私が愛する日本人へ～ドナルド・キーン

文豪との70年〜」渡辺謙が迫る文学人生、ノーベル賞にも影響力 ナビゲーター：渡辺謙、俳優：川平慈英、篠井英介、斉藤由貴、南野陽子など（9:00～10:00 p.m.）ドキュメンタリーとドラマの折衷の番組で、キーン氏と渡辺謙の対談も好印象であった。

10月11日、「文化と経済は車の両輪 超一流の芸術二流国」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化欄、p.10.

10月29日、「新潟・家族・親族 孤高一転 驚きと喜び 第二の故郷で交流楽しむ」キーン誠己『新潟日報』文化欄、p.17.

10月31日～11月8日、ジョー・オダネル「ナガサキ写真展」が新潟市西蒲区の妙光寺で開催。展示会のチラシに、ドナルド・キーン氏が、「いまに生きる日本の人たちが、あの時の日本、長崎の写真を見て、戦後の原点である人々の思いに触れることに意義がある」という言葉を寄せている。11月1日、「鬼怒鳴門亭日乗」第7回「美しい日本文化を守るために」『和楽』12月号、小学館。pp.106-08. (第15巻第10号 通巻No.164)

11月8日、「寂聴さん似たもの同士」『東京新聞』(ドナルド・キーンの東京下町日記)京都市右京区嵯峨野の寂庵に、作家の寂聴さんを訪問して、互いの近況の話で盛り上がる。

11月11日、「古典文学への熱意共通 同い年の寂聴さん」『新潟日報』文化欄 p.23. (原則的に第一日曜日に掲載される『東京新聞』の記事と同じもの。)

11月14日、「ドナルド・キーンの日本」前編「日本文学を世界へ」(NHK Eテレ：夜11:00～11:59)

11月21日、「ドナルド・キーンの日本」後編「日本人とは何者なのか」(NHK Eテレ：夜11:00～11:59)

11月25日、「キーン氏宛て未発表書簡発見、三島の米進出意欲克明、「鏡子の家」創作過程一端も」『毎日新聞』記事。

11月25日、「キーンさんを招いて 目先の効用とらわれず」京都大学総長・山極寿一『京都新聞』(夕刊)「京都大学ホームカミング・デイ」にキーン氏を招いた際の記事。

11月25日、「コンピューター ストレス発散に一役 時に敵対 せっかちな面も」キーン誠己(素顔の父 ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化欄、p.19.

12月1日、〈新春対談〉「『源氏物語』をご縁に、日本文化を語る」ドナルド・キーン(93歳)×志村ふくみ(91歳)『和楽』2016年1-2月号 第16巻第1号 通巻No.165.

京都・嵯峨にある清凉寺、嵯峨釈迦堂の名で多くの人に親しまれている。阿弥陀三尊座像は、光源氏のモデルとされる源融公みなもとのおとるの墓所でもある。小学館、pp. 42-51.

12月6日、北嶋藤郷「ジャパノロジストの真骨頂」(『二つの母国に生きて』(朝日文庫)の書評：にいがたの一冊)『新潟日報』朝刊26面。

12月6日、「天皇巡幸 旧友の進言」『東京新聞』(ドナルド・キーンの東京下町日記)米海軍時代から親交のあったオーテス・ケーリへのオマージュ。写真は、京大図書館で所蔵のコレクションを見るキーンさん。

12月11日、「戦後民主化へ巡幸進言 親友オーテス・ケーリ」『新潟日報』文化欄記事。

12月25日、「師走、クリスマス、元旦 明治神宮詣で恒例に」キーン誠己『新潟日報』文化欄記事。写真は、年末恒例の明治神宮への参詣で、手をあわせるキーン氏。12月初旬の伊豆宇佐美への旅行で、大好きな金目鯛の煮付けを楽しむキーン氏。

12月31日、第8回奥の細道文学賞・第2回ドナルド・キーン賞の募集締切り。選考結果は平成28年11月頃予定。奥の細道文学賞係(草加市自治文化部文化観光課)。

2015、『道徳：明るい人生、3年』愛知県小中学校校長会編：「わたしが日本人になった理由」(2013.4.24、抄録)

2016年(平成28年)

94歳

1月1日、関容子「あいたい人 特別編 ドナルド・キーンさん」(前)雑誌『浄土』法然上人讃迎会通巻900号。pp.16-23.

1月10日、「後世に日記は語る」『東京新聞』1面(ドナルド・キーンの東京下町日記)

1月20日、「日本文学の貴重な資料 後世に日記は語る」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化欄、p.18.

1月30日、キーン誠己「出会い 芸の道新た 教え請う 古浄瑠璃復活で絆深める」(素顔の父 ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化欄、p.20.

1月、「吉田襄助のこと」(日本語と英語で)を掲載、『襄助伝』(渡邊肇写真集)有限会社 diapositive.

2月1日、関容子「あいたい人 特別編 ドナルド・キーンさん」(後)雑誌『浄土』法然上人讃迎会2016年2・3月号。pp.10-17.

2月2日、「恩師への“義理”忠臣蔵に込め 米大学で歌舞伎上演へ キー

ンさん教え子が演出」(ポートランド州立大学の学生たちが、2月25日～3月5日までの計8回、「忠臣蔵」を英語で上演する。演出を担当するのは、同大のローレンス・コミンズ教授。)『新潟日報』

2月7日、「三島との最期の晩餐」『東京新聞』(ドナルド・キーンの東京下町日記)。

2月13日、「垣間見えた天才の異変 三島との最期の晩餐」『新潟日報』文化欄。

2月22日、「谷崎潤一郎の揺るぎない美学」『別冊太陽 谷崎潤一郎』平凡社。

2月25日、『石川啄木』(角地幸男訳) 発刊、新潮社。⁴⁾

2月、「原田ハマ 美のパイオニアに会いにゆくドナルド・キーン」『芸術新潮』2月号。

2月、読売新聞取材班著『戦後70年 につぼんの記憶』に、“伝統忘れた日本に「怒」”。

3月1日、「ドナルド・キーン×瀬戸内寂聴 93歳おふたりの元気な元気な往復書簡!」『和楽』2016年4・5月号(第16巻第2号 通巻No. 166) pp.32-30 2016年3月1日発売 小学館。

3月1日、ドナルド・キーン著『石川啄木』の出版共同記者会見(於新潮社)

3月3日、鎌田大介「歌人読み解き世界へ コロンビア大学名誉教授ドナルド・キーン氏『石川啄木』(新潮社)を出版(英語版も)」『盛岡タイムス』日刊1面。盛岡の先人啄木の生涯を大きく取り扱っている。

3月4日～25日、約3週間の予定で、コロンビア大学でキーン氏の指導を受けた、ポートランド大学のラリー・コミンズ教授の招きで渡米。コミンズ教授の指導で学生たちが演じる「忠臣蔵」を鑑賞。また「弘知法印御伝記」三段目をキーン誠己氏が語り、キーン氏がこれを解説。その後ニューヨークに行き、「内幕もの」で知られるJ. ガンサー夫人(99歳)を含む友人たちと旧交を温めた。オペラ大好き人間のキーン氏は、NYで「蝶々夫人」など3本のオペラを鑑賞した。

3月17日、「望郷の歌人に原点」『石川啄木』(新潮社)刊行。ドナルド・キーン氏に聞く。『盛岡タイムス』日刊3面。

3月20日、「啄木像をくつつがえす」『東京新聞』(ドナルド・キーンの東京下町日記)。

3月25日、「天窓」『盛岡タイムス』日刊1面。啄木と三島由紀夫の接点をキーン氏に質問。

3月25日、「タブーへの挑戦ようやく 啄木像を覆す」『新潟日報』文化欄。

3月25日、「春の雪～鬼怒鳴門（キーン ドナルド）先生のこと」『ド・ローラ・節子のきもの暮らし（欧州で生きる和の心の物語）』に掲載。世界文化社。

3月27日、作家松浦寿輝：「非凡な人物」の肖像—ドナルド・キーン『石川啄木』 pp. 20-21. 「波」2016年3月号（第50巻第3号・通巻555号）。

3月29日、キーン誠己「キーン家のお墓 遊び心あふれる家紋 広さは半畳 春には八重桜」（素顔の父 ドナルド・キーン……ともに暮らして）『新潟日報』文化欄、p.23.

※キーン氏の過去のエッセイから推察して、氏の墓地は、函館の立待岬の啄木一族の墓の近くか、風光明媚な、フェノロサの眠る三井寺か、はたまた、芭蕉の研究家として、芭蕉翁と背中合わせのような土地に墓地を求められるのか、とも想像していた。実際には、氏のお墓のあるお寺は、自宅マンションから歩いて1分程度のところにある真言宗の寺である。真言宗と言えば、空海の真言密教の根本道場となった東寺は、氏の大好きな寺院であるし、氏の恩師の角田柳作も真言宗であった。「こういうことを父はとても大切に思っています。」とはキーン誠己氏のコメント。

3月30日、海老沢類「ドナルド・キーンさん 評伝『石川啄木』 夭折歌人の現代性を活写」『産経新聞』朝刊14面。

3月、『三島由紀夫の面影』対談：ドナルド・キーン×宮本亜門（宮本亜門演出「ライ王のテラス」のプログラム）。

3月、『「日本の演劇」と「近松の世界」』対談：デイヴィッド・ルヴォー×ドナルド・キーン（デイヴィッド・ルヴォー演出「エターナル チカマツ」のプログラム）

1-3 / 2016 WINTER、「オペラの愉しみ」『音脈』Vol.61（東京文化会館公演情報）。

March 2016「People and Culture of Japan-Conversations Between Donald Keene and Shiba Ryōtarō - Translated by Tony Gonzalez Japan Publishing Industry Foundation for Culture」（司馬遼太郎との対談『日本人と日本文化』の英訳）

4月1日、「戦後70年に寄せて」『繁栄と混迷の戦後70年』時事通信社編著 pp.2-4。

4月2日、朝日新聞編集委員・市田隆のドナルド・キーン著『石川啄木』の書評。『朝日新聞』朝刊13面。

4月2日、海老沢類のドナルド・キーン著『石川啄木』の書評、『産経新聞』（3月30日）の同氏の同じ記事が、WEB上の「産経ニュース」にアッ

プされた。

4月2日、山田登世子のドナルド・キーン著『石川啄木』の書評。『日経新聞』

4月5日、一握の石「夭折歌人の実像」(「大波小波」)『東京新聞』夕刊5面(ドナルド・キーンの伝記『石川啄木』の書評、一握の石は筆名)。

4月7日、平野啓一郎「私達自身のような『夭折の天才』ドナルド・キーン『石川啄木』を読む」『新潮』4月号。pp. 220-23

4月20日、「オペラと文学～「ロベルト・デヴェリユー」をめぐって～」“MOSTLY CLASSIC”6月号、産経新聞社。

4月25日、「週刊アエラ」鈴木邦男の愛国問答197(鈴木邦男評『石川啄木』p.74「読まずにはいられない 変化を求める時代 今こそ啄木を読み！」)

4月26日、「寄稿：大成功 米学生が演じた「忠臣蔵」—ドナルド・キーン」『毎日新聞』

4月28日、『東京大学「教養学部報」精選集—「自分の才能がたりない」ほか教養に関する論考』に、「翻訳について」を寄稿。

4月、『Indigo: Tanka Poetry Collection』Mariko Kitakubo(北久保まりこ著)に、英語と日本語で序文。Shadba Press.

5月1日、鬼怒鳴門亭日乗(第8回)「料理と私」雑誌『和楽』6・7月号(第16巻第3号 通巻No. 167)

5月10日、『谷崎潤一郎全集 第18巻』月報に、“「猫と庄造と二人のおんな」のこと”。

5月11日、18日(21:30～21:55)NHKラジオ「ミュージック・イン・ブック」に出演。

(作家の松浦寿輝さんの音楽対談番組)ジュパルクの「旅への誘い」ベルデイの「船が」マリア・カラスの歌う「椿姫」などを聞きながら、楽しい文学と音楽の語らい。

5月13日、「キーンさん 足跡一目で 8月まで写真を展示、横顔紹介」(ドナルド・キーン・センター柏崎で開催)『新潟日報』朝刊17面。

5月30日、キーン誠己「ニューヨーク滞在 疲れ癒す親友の歓待」(素顔の父ドナルド・キーン……とともに暮らして)『新潟日報』文化欄、日刊15面。

6月1日、ドナルド・キーン『石川啄木』に関する鼎談書評。雑誌『文藝春秋』6月号。

鼎談者は山内昌之×片山杜秀×阿刀田高で、『石川啄木』の書評は、pp.397-99に掲載。作家阿刀田氏は、「ドナルド・キーンさんのような世界に影響のある日本文学者が、おそらく日本で最も人気のある歌人・石川啄木の生涯を紹介することは、我々にとって大いなる喜びではないでしょ

うか。」と語っている。

6月5日、歌人小島ゆかり「芸術は不道德の非難を恐れぬこと」『毎日新聞』記事。

6月11日、「仕事の幅広がる契機に 司馬さんとの親交」『新潟日報』文化欄、日刊20面。

7月1日、鬼怒鳴門亭日乗 特別編ドナルド・キーン先生のアメ리카紀行」雑誌『和楽』8・9月号（第16巻第4号 通巻No. 168）

7月26日、「英訳の源氏物語が契機 日本へ導いた大恩人」（ドナルド・キーンの東京下町日記）『新潟日報』文化欄。

8月8日、キーン誠己「京都との関わり（上）日本家屋に10年住む」（素顔の父 ドナルド・キーン……ともに暮らして）『新潟日報』文化欄12面。

8月9日、平成天皇の生前退位の意向のお言葉の全文が、新聞各紙に報じられた。同日のNHKの報道番組では、大部な『明治天皇』の著者であるキーン氏がコメントを寄せた場面が放映された。

8月13日、「キーンさんの啄木研究紹介 センターで企画展 柏崎」『新潟日報』13面。

8月29日、キーン誠己「京都との関わり（中）下宿先の影響大きく」（素顔の父 ドナルド・キーン……ともに暮らして）『新潟日報』文化欄14面。

9月1日、鬼怒鳴門亭日乗スペシャル ドナルド・キーン先生、文豪・谷崎潤一郎への想いを馳せる 雑誌『和楽』10・11月号（第16巻第5号 通巻No. 169）

9月12日、「追悼 2016 心に染み入る別れの言葉 〈中村絃子さんへ：東京・サントリーホールでの偲ぶ会（9.12）で「音楽にまじないをかけて伝えてくれた」〉」『週刊朝日』（12.23号）。

9月19日、ドナルド・キーン・センター柏崎 開館三周年記念特別講演会「ドナルド・キーン石川啄木の日記を読み解く ～最初の現代日本人～」基調講演「石川啄木の日記を読む」～キーン先生の啄木日記論を紹介しながら～ 講師：池田功氏。記念対談「石川啄木～最初の現代日本人～」ドナルド・キーン×池田功。合唱「春まだ浅く」「盛岡市立洪民小学校校歌」（柏崎市アルフォーレ）付記1

10月1日～12月11日、「角田柳作とドナルド・キーン」展（群馬県立土屋文明記念文学館：開館20周年記念）

10月3日、「月の光」花街で味わう（吉田健一と今代司）吉田が新潟の名酒を飲んで漏らしたひと言「月の光を飲んでいるようだ」をキーンは回想に書いている。「新潟日報」13面（文・論説編集委員 野沢達雄）

10月6日、「ドナルド・キーン啄木を語る」『盛岡タイムス』4面（特別寄稿：北嶋藤郷）付記2)

10月9日、「『歌聖』啄木の人間味」（ドナルド・キーンの東京下町日記）『東京新聞』1面。

10月10日、『朝日新聞』の短歌投稿欄に、下記の短歌が紹介されている。

軽井沢駅にて「あさま」待つ列に佇む微笑ドナルドキーン

高野公彦の選評には「日本の風景の中に溶け込むキーン氏」とある。

10月16日、記念講演会「先生」ドナルド・キーン 対談「私の会った日本の作家たち」ドナルド・キーン×堤伸輔（於：土屋文明記念文学館）。

10月17日、「戦争の荒波 培った師弟の絆 D.キーンさん、恩師・角田柳作を語る：開戦前、学生は私一人／日米共に愛した」『朝日新聞』記事。

10月17日、「人間臭い実像明らかに「歌聖」啄木の評伝」『新潟日報』12面。

10月23日、「文化・芸術を愛する父子の日常」エッセイ集『黄犬ダイアリー』（平凡社）の出版について、著者のキーン誠己氏に聞く。『毎日新聞』11面。

10月24日、「キーンさん初の親子共著」『毎日新聞』夕刊「人・模・様」。

10月25日、「川端康成、『斜陽』の翻訳喜ぶ 太宰君キーンさんのような訳者に恵まれ幸ひ」キーンさん宅で未公開書簡見つかる『朝日新聞』。

10月26日、「天才は遠くから眺めるべき」啄木を語る ドナルド・キーンさん、新潟で講演『朝日新聞』夕刊。

10月28日、「食卓に息づく品々 思い出とともに愛用 イニシャル入り“家宝”も」キーン誠己（素顔の父 ドナルド・キーン……とともに暮らして）『新潟日報』文化欄 20面。

11月1日、鬼怒鳴門亭日乗スペシャル 軽井沢対談「日本文学と工芸にみる、日本人の美意識を考える」雑誌『和楽』12・2017 - 1月号（第16巻第6号 通巻No. 170）

11月6日、黒田杏子「日本で生きる大晩年の記録」ドナルド・キーン／キーン誠己著『黄犬ダイアリー』の書評「にいがたの一冊」『新潟日報』22面。

11月19日、「私の魂を揺さぶるベートーヴェン～「フィデリオ」「エロイカ」のことなど～」

11月25日発行『混沌と抗戦（三島由紀夫と日本、そして世界）』（国際三島由紀夫シンポジウム記念論集）水声社。「没後四十五年『悼友』対談ドナルド・キーン×徳岡孝夫」「三島由紀夫の面影 ドナルド・キーン×宮本亜門」を収録。

11月28日、「幻の古浄瑠璃 英で上演 来夏 キーンさん橋渡し」『毎日新聞』夕刊1面。

11月29日、「大きな器で人材育てる：『日本学』のセンセイ」『新潟日報』文化欄21面。

12月4日、「第44回音曲芝居噺研究会」銀座洋協ホールにて開催（12：30－）。キーン誠己氏が落語家・林家正雀との共演で、「越後国 柏崎 弘知 法院御伝記（三段目）を弾き語る。キーン氏が古浄瑠璃について講演。

12月6日、「日本人の戦争と平和」〔対談〕ドナルド・キーン×久邇邦照 「kotoba」季刊誌2017年冬号 通巻No.26。

12月7日、CD「中村絃子 フォーエバー～モーツァルト・ピアノ協奏曲第24番ハ単調～」に追悼文。株式会社ドリーミュージック、2016.12.7発売。

12月10日、「私と中央公論で、〈六〇年の月日と終生の友人たち〉」『中央公論』（2017年1月号、通巻1598号）

12月19日、『^{キーン}黄犬ダイアリー』出版祝賀会（於）山の上ホテル（本館1階「銀河の間」）

○前半は、キーン氏の挨拶とキーン誠己氏の古浄瑠璃演奏。鳥越文蔵氏の解説。

○後半は、俳人・金子兜太氏の祝辞と立食パーティー。司会は、俳人・黒田杏子氏。

○作家の沢地久枝氏や俳優の木内みどりさん、キーン氏の教え子で英語歌舞伎を広めている米ポートランド州立大学のラリー・コミンズ教授も顔を見せた。約170名が参加した。

12月20日、「キーンさん出版祝う『東京下町日記』掲載本」『東京新聞』社会30面。

12月23日号『週刊朝日』「追悼2016 心に染み入る別れの言葉」に、〈中村絃子さんへ：9月12日、東京・サントリーホールでの偲ぶ会で「音楽にまじないをかけて伝えてくれた」〉

12月29日、キーン誠己「神秘的な集中力 朝から晩まで執筆 独自の視点で啄木論刊行」『新潟日報』文化23面。

12月29日、ドナルド・キーン「安倍首相 真珠湾慰霊 心がこもった言葉で発信」『毎日新聞』〈オピニオン 論点〉

註

¹⁾「ドナルド・キーンの東京下町日記」（『東京新聞』）は、2012年10月6日に始まり、毎月、第一日曜日頃にコラムを掲載。2012年は3回、2013年は12回、2014年は12回。

現在までに、合計27回掲載された。下記に示した2015～16年を加え

での合計は51回。(『東京新聞』での連載は今年で6年目、『新潟日報』では、2014年6月17日に始まり、今年でまる4年目となる。)

2015年 (No. 28~39)

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1月11日「他国学び 自国を知る」 | 2-8 「野球を詠んだ子規」 |
| 3-8 「重なる大震災と空襲」 | 4-5 「日本兵の日記 私の原点」 |
| 5-6 「天才三島の虚無感」 | 6-7 「知的で活発 98歳女性」 |
| 7-12 「偉大なる『大谷崎』」 | 8-9 「暴走黙殺の果て」 |
| 9-13 「『世界のオザワ』に学べ」 | 10-4 「超一流の二流芸術国」 |
| 11-8 「寂聴さん似たもの同士」 | 12-6 「天皇巡幸 旧友の進言」 |

2016年 (No. 40~51)

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1月10日「後世に日記は語る」 | 2-7 「三島との最期の晩餐」 |
| 3-20 「啄木像をくつがえす」 | 4-24 「忠臣蔵は世界に通ず」 |
| 5-8 「後悔 母に伝えたい」 | 6-5 「司馬さんとの親交」 |
| 7-24 「日本へ導いた大恩人」 | 8-14 「本読み平和への旅を」 |
| 9-4 「五輪報道への違和感」 | 10-9 「『歌聖』啄木の人間味」 |
| 11-20 「『日本学』のセンセイ」 | 12-4 「玉碎の悲劇 風化恐れる」 |

- 2) 高見順『高見順日記』の参考文献については、下記参照。
 ・『完本・高見順日記 昭和二十一年篇』凡書房新社、1959
 ・『高見順日記 第1~8巻 (1941~1951年分)』勁草書房、1964~1966
 (初版)
 ・『高見順日記 続 第1~8巻』勁草書房、1975~1977

- 3) 『金閣寺』三島由紀夫の傑作は、下記のような経緯を経てNYで出版された。

[翻訳者] 日本語からの英訳者 アイバン・モリス。[序文] ナンシー・ウイilson・ロス。

[挿絵] 小松 文。[版元] ニューヨーク：アルフレッド A. クノップ社 版 262頁、4ドル。

〈書評者〉ドナルド・キーン

「美そのものが致命的な怨敵おんてきとなった」

1950年7月、京都の金閣寺が、狂気に駆られた若い徒弟僧の、計画的放火により焼失したと聞いて美術愛好家たちはショックを受けた。裁判にあたり、この見栄えのしない吃音気味の僧は、すべて美への怨敵情

念により、600年を経た建造物の破壊へと衝き動かされたと語った。彼は何らの後悔を示さなかった。

この出来事と、その他の彼の生活の細目に材を求めて、読む人の心を奪うような小説が三島由紀夫によって書かれた。本書は、アメリカ合衆国で発刊された三島の3冊目の書物であり、弱冠34歳に過ぎないけれども、彼をして最も著名な日本の小説家たらしめた。彼の初期の作品群はいずれもきわめて興味深いが、『金閣寺』は、世界の傑出した若手の作家のひとりとしての地歩を固めたものである。

一人称で語られるこの小説は、徒弟僧溝口と金閣のあいだの、すなわち彼の父親が「金閣寺ほど美しいものは此世にない」と最初に告げた時から、金閣を破壊したあとで、ひと仕事を終えて、一服している人のように煙草をふかす瞬間までの、不可思議な関係を明らかにしている。この焼亡まで金閣は、絶えずその意味合いを変えながら、彼の想念を支配してきた。戦争中それは「現実世界のはかなさの象徴」のように思えたが、しかし、金閣は空爆を免れると、時には威嚇的に、また時には安堵させるような威厳をもって、未来永劫の存在を主張したのである。金閣によって具現された美の化身が眼前に立ちはだかると、溝口は抱擁を待つ女を腕に抱いても、欲望を遂げることができなかった。彼は金閣を破壊することによってのみ、自分自身を自由に解き放つことができると悟るのである。

溝口の居た寺は禅寺であり、いくつかの特徴的な禅の公案（禅のなぞ）が、この小説を特色づけている。公案の「南泉斬猫」では、（山寺に現れた）一匹の仔猫の所有をめぐる東西両堂が争ったさい、南泉和尚は、議論の決着をつけるために、仔猫を斬って捨てる。あとで帰ってきた高弟の趙州は、ことの次第を聴くと、履いていた泥まみれの草履を脱ぎ、頭上にいただいて出て行った。南泉は、「お前がここに居てくれたら、猫の児も助かったものを」と嘆息した。

この公案は、1945年の日本の敗戦の日に、この寺の老師によって、徒弟僧たちに語られた。彼等は、公案の意味が解らず、老師が戦争には触れずに講話を打ち切ったことに当惑した。説明はなされなかったが、おそらく、趙州が頭上に屈辱の草履をいただいたことが、日本の敗戦を象徴しているのであろう。この同じ公案は、柏木という辛辣な内反足の僧によって違った解釈がなされる。彼にとって、仔猫は美であるが、不調和をもたらしたために南泉に殺された。しかるに趙州は、頭上に草履をのせて、解決の安易さを諷したと。また別の解釈も、柏木は示唆する。

溝口が認識によって美を擁護する趙州を演じたいと願っているのではないかと。しかし溝口は、彼の美に対する感覚が吃り^{ども}の本当の原因かもしれないと訝りながらも、「美、美しい物、これらは僕の最大の怨敵です」と答える。

もし溝口が、破壊者であり、解放者である南泉となるのなら、趙州は老師であり、この男は、溝口が売春婦の腹を踏んで流産させたお礼に米兵から貰った、米国煙草^{たばこ}の何カートンかを快く受け取るように、悪をも受け入れるのだ。のちに溝口は、老師が寺の金で、芸者遊びをしているのを知っていると宣言して、そのことを責めると、老師は「何にもならんことじゃ。益もない事じゃ。」と屈辱を平然と受け入れるのみである。最後に溝口が老師を見かけたのは、(庭詰の新来の客僧のような)驚くべき謙虚な姿勢で、祈りを捧げている姿だった。

このように複雑な構図にもかかわらず、この小説は読破するに困難ではない。日本では30万人以上の読者を魅了した。単に、有名な寺院を焼亡させたひとりの男の物語としても読める。しかし、特別な重層的な意味合いは、個々の読者によっていろいろと違って黙示されるように思われる。ナンシー・ウイルソン・ロスの素晴らしい序文は、アメリカ人が本書を堪能するための指針となるであろう。

[写真] フランシス・ファー撮影の1950年焼失する前の京都の金閣寺
『ニューヨークタイムズ』紙発刊日:1959年5月31日 著作権:ニューヨークタイムズ社 (北嶋藤郷訳)

- 4) ドナルド・キーンは、日本文学の古典から現代文学までの和歌や俳句の翻訳で知られているが、2016年2月に発刊した評伝『石川啄木』（新潮社版）には、啄木の短歌が、キーン訳で40首翻訳されている。どれも優れた名訳である。また、キーンのコロンビア大学の初期の教え子のひとりのカール・シーザー（Carl Sesar）の11首の啄木短歌の翻訳は、恩師のそれに勝るとも劣らない英訳である。上記『石川啄木』註（第一章）には、「カール・シーザーの翻訳の現代的な英語は、シーザーがテキストをいわば『ジャズ風』に演奏しているように見えるかもしれない。しかし彼の翻訳は事実、意味も口調も啄木の原文に忠実である。」（p.331）と記されている。

キーンの高弟・シーザー訳『石川啄木詩集』について

石川啄木生誕130年の記念の年に、またカール・シーザーの名訳『石川啄木詩集』が講談社インターナショナルから出版されてから丁度50年目に当たる2016年に、「ドナルド・キーン・センター柏崎」で、「啄木展」が開催されることは、まことに意義あることである。

シーザー氏は、今年83歳になるが、コロンビア大学でドナルド・キーン氏の薫陶を受けた、初期の日本文学の俊秀な研究者のひとりである。「啄木没後百年追悼講演会」（函館市芸術ホール）の講演で、キーン氏は「当時、私の教え子に変わった青年がいて、もともとラテン語が専門でしたが、日本語に切り替えました。私は彼を啄木のような人だと思ったのです。それで彼に啄木の短歌を翻訳させました。素晴らしい翻訳です。」と語っている。では、恩師を超えたといわれるシーザー氏の翻訳を、『一握の砂』より一首紹介してみよう。

世の中の明るさのみを吸ふごとき	they seem to drain all light
黒き瞳の	from this world
今も目にあり	even now I see
	your dark-lit eyes

この短歌は、函館の弥生尋常小学校の清純な女教師・橘智恵子の面影を偲んだもので、啄木の北海道漂泊時代の代表歌である。智恵子の明るく、美しい瞳が今も忘れられない、と歌っているのだが、シーザー氏の翻訳はまことに見事である。

キーン氏が今年の2月に上梓した大部な評伝『石川啄木』の〔註〕の冒頭には、「カール・シーザーの翻訳は事実、意味も口調も啄木の原文

に忠実である。」と的確に評している。

また、ISHIKAWA TAKUBOKU POEMS TO EAT TRANSLATED BY CARL SESAR (2012) は、一頁に一首の、見開きにすれば二首の短歌が掲載されているだけで、頁数もうっていないユニークな編集で、見開きの左に啄木の自筆の短歌が載り、右にシーザー氏の英訳が付いているものも数首ある。『一握の砂』から 83 首、『悲しき玩具』から 59 首、「その他」の 35 首、計 177 首の翻訳はすべて秀逸である。ドナルド・キーンとエドワード・サイデンステッカー両氏の本書の書評は、翻訳を絶賛した素晴らしいものである。

『石川啄木詩集』には、全編を通じて、当時の第一級の芸術家の桑田雅和の版画が処々方々に挿入されていることにより、本書がなおさらに洛陽の紙価を高めている。

今回、シーザー氏のご厚意で、彼の 2 冊の初版本を、この「啄木展」のために貸借することができた。このような美本を鑑賞できるのは、おそらく空前絶後の快挙である。

余滴として、ドナルド・キーンは、自作の俳句を英訳することも心がけている。筆者の知る限り、英訳の付いたキーン句を紹介する。

- ・「白たまの消ゆる方に芳^{かた}夢^{ホームラン}蘭」 (1972年 8月15日、高校野球取材、甲子園にて)

In the direction
With the white ball disappeared
A fragrant orchid

- ・「涼しさや祭りの後乃秋の朝」 (1973年10月 3日、伊勢麻吉旅館にて)

How cool it is
This autumn morning after
The celebration

- ・「行く夏や 別れを惜しむ 百合の夏」 (1993年、徳島県穴喰の陶芸家梅田純一氏の絵に寄せて)

Departing summer

How sad to leave behind me

The summer lilies

- ・「罪なくも流されたしや佐渡の月」 (「佐渡ぶんや紀行」より)

Though guilty of no crime

I would gladly be exiled -

The moon of Sado.

- ・「ゆく夏や^{たこと}田毎を守る石地藏」 (「信州ざぎ虫紀行」より)

Summer is passing by!

Guarding each of the paddies

A stone Jizo.

- ・「さまざまのこと思い出す伊賀の秋」 (英訳は未訳)

付記1) 国際石川啄木学会会長・池田 功 (明治大学大学院教授) 氏は、数回にわたって「ドナルド・キーン・センター柏崎」を表敬訪問して、短歌 10 首をものした。

「ドナルド・キーン・センター」 池田 功

- ・越後国柏崎に開館す取り持つ縁のブルボンの菓子
 - ・卒寿過ぎ書き続けたる評論のどこに隠れし情念の闇
 - ・日米の互いの文化つなげては二つの祖国持つ男なり
 - ・アメリカの書齋再現したる部屋キーンの頭脳その中に居り
 - ・眼下にはハドソン川の流れあり大河の中を孤舟一艘
 - ・公房に太宰に三島訳しては世界に拮げしキーン劇場
 - ・死に果てし兵士の手帳 偽りのなき心情に言霊を見ぬ
 - ・啄木は現代人と語りたる赤裸々に書く心を褒めし
 - ・独身を貫きたりて九十二寂しからずや薔薇を一輪
 - ・帰化後は鬼怒鳴門名乗りたる鬼怒川鳴門ゴロゴロと鳴る
- (『リトム』133号 2014年7月) p.48.

付記2) 『盛岡タイムズ』 寄稿 (2016年10月6日掲載)

「ドナルド・キーン啄木を語る」

盛岡の近くの寒村の曹洞宗の寺に生まれた石川啄木は、神童と呼ばれ、天才とうたわれたが、異郷の地にあっても思郷の念はけしがたく、くかにかくに洪民村は恋しかり／おもひでの山／おもひでの川>と回想している。啄木は、歌人であるとともに詩人でもあった。

啄木生誕130周年にあたる今年の春、高名な日本文学研究者のドナルド・キーン(93)は、大部な評伝『石川啄木』(新潮社版、303ページ)を上梓した。新潟県の「ドナルド・キーン・センター柏崎」ではこれを契機に「石川啄木の日記を読み解く－最初の現代日本人」と銘打った企画展(～12月25日まで)を開催している。キーン自身が啄木研究に使った資料の他にも、盛岡手紙館、函館市中央図書館啄木文庫(洪民日記)「ローマ字日記」など9種類の日記のレプリカからは貴重な資料の提供を受けた。が、キーンの高弟であるカール・シーザーの見事な英訳『石川啄木詩集』もじかに手に取ってみたい逸品である。

さる9月19日に開催された記念講演会では、「石川啄木の日記を読む～キーン先生の啄木日記論を紹介しながら～」と題して、国際石川啄木学会長・明治大学大学院教授池田功氏の基調講演を聴いた。氏が用意した周到な資料(13ページ)を駆使しながら、「森鷗外の日記などは、記録的・備忘録的であるが、啄木日記は単なる忘備録ではなく、感情を率直に記し、書くことで自らを鼓舞していた」と長年の啄木研究のうんちくを傾けた熱演は、900人を超す聴衆を魅了した。筆者は教授の講演を拝聴しながら、百年の時空を超えて等身大の啄木が立ち上がってくるような^{めいてい}酩酊感に浸っていた。

キーン×池田の対談の冒頭で、「キーン先生は、正岡子規は、近代人、啄木は現代人とおっしゃっていますが、そこらへんのところからお伺いします」と質問したのを皮切りに、2～3のテーマで興味深い対談が進められたが、制限時間の30分はあっという間に終わった。教授が最後に「もし啄木が今生きていて借金を申し込まれたらお金を貸しますか?」と質問するとキーンさんは、「貸しません。天才は遠くから見るものです」と話し聴衆の笑いを誘った。

盛岡タイムズ(3月17日)には、「望郷の歌人に原点」という秀逸な記事があるが、その中で「啄木と友達になれたか」という質問に、キーンさんは「一晩一緒に酒を飲みながら話すのは楽しいが、友達

にはなれない」と断言している。

キーンさんは、すでに次作の構想を練っていると聞く。図書館や東京・神田の古書店をのぞいたりしてあらゆる資料を渉猟し、深く読み解いたうえで、執筆を始めるのが彼のスタイル。明晰な頭脳をフル回転させることが、彼の長寿の秘訣でもあるようだ。

キーンさんは、来る10月16日「角田柳作とドナルド・キーン」展（土屋文明記念文学館）で「先生」と題して講演し、対談「私の会った日本の作家たち」を行う予定。

今年の国際啄木学会は、11月5日～6日に盛岡で開催される。日本歌人クラブ会長・三枝昂之氏の講演、啄木の故郷の渋民や歌碑、彼の愛した山河を自分の目で確認できることを、今から楽しみにしている。（北嶋藤郷）

（主な参考文献）

Donald Keene: *Chronicles of My Life AN AMERICAN IN THE HEART OF JAPAN*
Columbia University Press, NY

_____ : *The First Modern Japanese The Life of Ishikawa Takuboku*
Columbia University Press, NY

_____ : *On Familiar Terms To Japan and Back, A Lifetime Across Cultures*
Kodansha Globe

_____ : *Meeting with Japan* Gakuseisha

_____ : *Travels in Japan* Gakuseisha

ドナルド・キーン 『ドナルド・キーン自伝』 中公文庫

_____ 『石川啄木』 新潮社

_____ 『ドナルド・キーン著作集』 (1~14) 新潮社

ドナルド・キーン 『世界に誇る日本文学者の軌跡』 河出書房新社